

要約

近藤 結

パンダは中国を代表する動物である。

パンダは「中国を代表する動物」として認知されている一方、その帰属をめぐる問題はしばしば政治的な争点として浮上する。

しかし、パンダの「中国を代表する動物」としての地位は歴史的に形成されたものに過ぎない。なぜ現実主義的な観点からすればおよそ国際関係にとって重要であるとは考えられないパンダがなぜ政治問題と結びつけられるのだろうか。

この問題を理解する為に、本稿では中国の国際関係との関連性の中でパンダが「中国を代表する動物」となった背景を説明する。

パンダの贈呈以前、パンダ・ブームがアメリカで起こっていた一方中国はパンダに対して特別な関心を払ってこなかった。ところが、中国国民党中央宣伝部国際宣伝処は1941年アメリカ合衆国にパンダを初めて対米宣伝活動の一環として贈呈した。本稿は中央宣伝部においてこのパンダの贈呈は、単に中米両国の友好を演出するだけのものではなく、同時に中国が「文明国」としての価値観を備えていることを示すものでもなければならぬと認識されていたと指摘している。

以上の議論から本稿は、1928年から1949年にかけて形成された「パンダ外交」は、①日本の軍事侵攻にともなう国民政府にとっての西南地域の重要性の高まり、②自国領内の動物は自国によって保護、研究されなければならないという主権意識の高まり、③欧米社会において興隆しつつあった動物愛護思想という「文明国」の価値観への適応、④アメリカの中央政府だけではなく民間社会からも中国への同情を獲得しなければならなかった戦時外交下での需要、といった歴史の重層的な文脈の中から生まれてきたものであったことを指摘したい。

結論として、パンダが「中国を代表する動物」となる過程とは、パンダに対する振る舞いが国家の「外部正統性」を構成する要素となりうるような国際関係に中国が組み込まれていく過程に他ならず、この点は現在の状況にも多分に通底するものであると考える。